俳諧文庫　五

5

七くさ集

へ 5
1139
5

門 へ5
號 1139
巻 5

呉の張翰ハ鱸の膾に秋風をときて
なつかしみを思て曰人ハ身こゝろざしに
適するをこそ貴し何ぞ千里の外に
来て身の名爵を要せんやとて
やがて官を棄て田里に帰りし
とぞ秋意の人を感ぜしむるに
かくのごとし出雲の月と東都に

遊ぶることに七年都下の俳諧者
流交らんといふものゝ中に呉竹亭
楽みをさへ知しかもむかしをもて友人
月花にまじはりて遊べる中にも文雅し
興をとりしも一歳秋意をきゝて田
心の情を発して句をよみ出しとゞまる
色を知し其経意友とまなて曰呵

やハらかなることのはしさをなす
しるさむとのをつたへしあまたを
下さはとしるつきまさかしれや唐
醜をさしるもいそれこゝろの奥のくまぐま
くもりての很ふさむ君彼ることし
まんと解意を修行して鈴無道
をまくめ一句を賤劣しくて序

こ操ることころをなすりぬ
こゝ秋の暮も日も
なるき新しやるとて
意尾 歩牛

小車集發句之部

○春なれや香なき草にも花さけば　山城 梅室

○月の雲動けば梅の匂ひ哉　芹舎

○足袋ぬげば又川の流るゝ日和哉　九起

○雲もまた絵かけて似たる桜の内　宗守

○雉子の尾に触れて山吹葉一株　鼎花

○朝ぼらけ花にのりかゝる艶　禾明

○人声も此中道も夕べの梅　淡哉

○見ゆるや物の霞かなの朧　秀仙

○村雨に静まりてやも春めいて　也然

○雲雀物見ゆる夕も明るく　石翁

○菜桜も海山にみゆる朝の春　梅通

○ゆふぐれ雲のかゝり川しても柳の影　桜溪 鼎左

○鶯鳴くや田の村つゞき鳥出るか　素庵

門通る提灯いやしく初がらす　白誇

見るうちも秋夕くるる庭の梅　松宝

一 日南来て咲つくみけもまぎれ　岸一

一 月清しうれへちかうなき芦辺　寿乙

一 声し明日も明行秋の一里　如阜

一 立なからふ松は梢も雲の峰　林雪

洗手山の茶店に休らふ

三 暮を告る山の井中のしちる桜　可大

日暮ゆくの汗あさきくるる宵哉　尾張 雨后

霜飛を見るなりさしも抱火桶　月底

ながれ床打手を何しらき月夜かな　鶴汝

ころしもつきわかる松葉掻　家光

三 秋夕旅露重ながる桔梗　一清

咲筋いなかれの行くも山の萩　呉川

一 年の咲て残るなかりぬ積み雪　梅程

一 降春の金はれなりし春的　蓮阿

二 陽炎をさしかりし消すも彼かしる　季曠

蛍の来るけ見るや竿のさき　不退
三ちるとても一葉ヲ引や柳の糸　里夕
一吹かへる風の川ゆく若葉かな　左釆
一ちり止てくれる夢や夕紅葉　待白
一風寒し梅ハいつまで咲つゝみ　桃里
一磯ちよき鶯の様よ小春かな　三機
一象宮や光に扇手向ける　芳暁
行く雲や納屋の萩刈手さゝる　庵知

一橘の花さくや清水の波かな　鶴一
落露の雫ハ明るし空の月　文之
春風や花見て居て出遊びけり　黄山
花粒ふ折くるけるや猫の恋　烏津
かし堀のもみぢ木井の汐の柳かな　宗重
一森の実て蜻蛉岩のゝ柳かな　石釆
狸のまちに来しゝ涼桶ヲ孔　波文
初冬や落葉積もる庵の舟　完伍

二 雪の葉見えてかくれぬ戸口かな　之岳

三 矢一筋射たしかり梅の花　蓮宇

一 人影のうすく降る年の雪　貞山

● 淡雪ものゝ動きぬ春の水　杜水

春咲しや梅の能に深かへる　鳥谷

三 降出しくれ花もや植る竹　甲斐 竹庵

一 新しく雲の中に花も散りけれ　竹良

一 志ふ春かりそめ我らぬ世かな　松坂 立字

山吹や手をこの日和の人通り　知足

二 咲きそめてまだ春の河かな　江戸 為山

三 物いふもしや柳桑は啄　由勢

桜の空や雲井路よきみさす　丁知

糸ゆく腹の光や初しのつき　山方

分け行し月に露ちる夜かな　通流

夜の松や紛るるの仏る暑か　無写

三 鬼つる暑見えきりや蝉の形　等哉

〻冬枯て咲日和を春し苗代田　松口
一桃の夜をつくれ柳かな　如学
川へ入りも何の由ぞ霞ゟ只あるき　文和
風止て障子何きれ汐干哉　一意
茶たる旅亦ら花咲梅ぞ　湖麿
三月みけを楽しみて明ても稲の花　常住
何よりも眼に昔しさよし冠柳　経旬
一町中に花咲出して何る秋　如丈

一出かゆきや朝日がけやく雪の上　哉折
毎としも何の日傘や匿漢堂　銀壺
一つれそしし月にもまへや冬の梅　寸丹
法あるを恋して
一日をもみは枝ぶ見えけ紅葉哉　梅子女
一初ちり栗や稲にそえてさるしへ　倫光
二花つく今朝れ枝打や飛むる　葉於
山寺にタ日御出て出月かな　芳山

笠脱て体も咲や蝶の声　遊水

ゆけと人にあはぬ蝶や京の秋　不教

露吹く蜂にからまる草かな　雲哉

槙の戸や村雨の中に吹く霧　淮之

蓬莱や綿を拂ふて掃りけり　攸同

一 一丈の葉末ならぬ秀菊かな　雲年

今咲や花命をしらぬ麦畑　米山

一 牧さしぬ片手を柳きる小女　尾山女

一 梅一輪ちりて動きぬ池の水　芝甫

志らしらと草木も濡ぬ霜の雨　棠里

ゆくりなく笠にも見ゆる柳かな　山峰

素繚の声やる音の田の月夜　葛布

吹て来る木葉さらふ昔かな　竹女

一 志ら露やまた咲しぬ桃の奥　来路

一 年くれぬ似合の事をもうす羽織　卯月

言とはぬ蟬しくむ飛ぶかかな　米花

堀川もせきとめる樋を汲む水　亀汀
風ゆるき袖のあゆも花の丹け　升堂
夜鶯の寐所静を飛ぶかる　常木女
・さし汐も浅き深きのゆくゝ子　不染
蘋にさし篝る柳のさはぎ哉　洞雪
はなやかなき影も出る日あり花盛り　如遠
春の花も遠眼なる不尽の斗り　松舟
・樹の元みよれハ日中を帰坂哉　東洲

せり落る鶯ちくくも千日日　言山
うちはも雨もあかき雨に浅き物　白起
・立のきる波まも河ろもあそこらし　竹兵
松苗のかしら若のめく雲の下は　北壺
萱立もちさり寒まを鹿の啼る　梅笠
不時なら只見る山を初ものみ　月村
三
鶯の尾足返けて蕎ねし　見示
・若ちゃくの日和にちるも桑の花　一具

初雪や通りかゝりの人まねの　雪菜

咲にちるきしく晩るなりけり　妙雲

秋の夜や白き河原の薄舟　湖雲

高細の尾とりも来れ深き居　舟雄

業のひかり物とらる浪しれ　仙酔

書きも人に尽て居なりなりの風　一造

続く行春の秋ゝ深き落葉散　不つ

只居てもちらし日の行る二月なれ　堂寿

九

閑かれの雪白きし深くもしれ　文直

晴し秋もあたまゝなれ天の川　游自

ちりとるしとりの思ひもや霞む里　抱儀

雪とけもうれ草を落れ過なれ　乗郎

涼しさや尤のゝ行きし芋嵐好　松堂

ちら萩も月の尾花ちりてきつなれ　惟孚

長雲も小鳥もつかぬ万年青の実　秋香

一とせ中て残まゝかれて初しぐれ　龍守

しき隂地のおくに霞孕み　留菜

秋の夜も蓋のめてふらの営にし　花遊

白扇似つかはしく只中のし　雲舟

鮎鍋の日除にもなる椽の露　千之

遠山も黍の穂につく新秋自　年々

流来たる象舎出来て初袷　弄佳

稲妻もつらぬ庵して秋のいそ　樵漁

荒の又菊小竹たる晴よふり　万丁

ゆきに銅さかへ蚊帳の支度哉　東之

若楼も光進へ高き新かな　松鶴

青柳もなみ四五日営のつは　墨芳

小雀も待友待ず待梅花　浅丸

蛙のうたも哭き思ふ雨の来る　独湖

此里は秋まで露の花　波鵆

花帰のかえらむも藪の中　鶴米

嵯峨は世を忍のふ変る秋の蝶　柳堂

ゝる鉢や花ひらく露て月にある　完路

散ゆくや宮しる若手の鯛哉　照水

菊さくや花も山も芝は雲　筆須

秋の夜も木隠れは見えて鳴る鶴　蒼亭

さのみ女の暮を待ちける牡丹哉　瓦村

春風や滝は芦原出つる　菅丸

下る時雨に新のゆく此哉かな　素梅

柳しは見えぬ明け出す手の上　鶴年

初秋は中くにうつるかゞみ哉　物外

さし引の自然や汐も見えにけし　味岳

夜の秋や庫の枝しぬ人ゝ　菊枝

まつものや庭見出ける新茶かな　一夜亭　芦明

雨はりと鳴あまき秋の庫さみしさかな　素友

梔の花や打ふしくすも来ル　宗山

かゝさら水楼に出る月や月の緒　百丈

年し芦の舟路見えける蛍か丸　波静

杉箸は白きまゝも鮎の味　山子

人ゆくや夕顔さける辻田ゆう　さく雄

ゆふや清水くめる乞食のかへり　葉古

何となく紀月は夕べ似た事に　遠洲

桜の実揉める肇現や茂り　魚々

先顔の物としたる朝の山寺小　阿基

月の出て手あらふ見ゆる雲の都　武生　南々

下るなれば何ふ方と此のうつり　嵩之

宇の毎夏も小坂の露の丸　五渡

継顔を吉さんとするや水の盛　佛山

てふしくらく初日のけふや涼　恵姝

蓋ゆ野ハ生れ手なる行きし月　桃人

顔出や潤ひわかちて破れたち　徹自

山吹や止まりまゝたゆ夕の雨　業暁

太ひらかなしきハ法しの楓　短去

只さくま顔ハ何と紀顔を着せたり　三巣

錦萩や白衣ふるき法の秋　清高
小池まで河の流れて芒散雪　安房　望高
夜の萩よ明け方寒し竹柱　松高
降そゝく思ひ掛けなや花曇り　悠賀
峯や山出しとして日のめぐみ　静里
笑しう萩を明へつゝ垣りれ　桂園
落雲は木々を去られ紅葉は　鳥鳥
菊香や筆のおりしも盃字菊　季氏

行ゝなき見こゝろ秋つゝ柿られ　鏡江
朱つきの草挾ちたゝ夜の月　好ん
明られは雲の扇出て折らさし　文游
降りしく夢見て行ふや花の壺　あや雄
素都や松月に見て山の邑　上総　東成
精き木の竹かゝしてる暑さ見れ　南芳
垂を花のまんまるく也て稲等竹　壺雪
粗しとは心当きく夜のへだてかな　東味

白つゆもちりて尾花に手新しき　白水

よそに見る鹿子も澤の遁りかな　東只

山あらしかくしておきしその花の春　一溪

手かゝるもうき数寄に出かりの帰り　自松

月の出るところへゆるる碇かな　總園

菜かられ子友も秋萩風に似たり　東鯉

晴かゝる雲よりも渡る秋の蝶　松水

無きを渡る風さへなくて猿月　松八

近江で見た花の春さる花かな　一水

梅折るもいらできよくも山の人　柳塘

稲こきの渡るに打かな　下館 泥翠

岡もる里の日和も花の花　亮什

篝きえぬ月の糸や秋の雲　江月

若衆るも何も秋の聲　旭窓

秋萩も垣に伸ていさぬかり　二嬌

秋立の高きにも梅の花　之桂

子猫の声は笛ともれ来る春の宵　東里

菜の花も野まで出る程春の風　半乳

人静は行くて雲ながら舟　泊老

折調子かゝると見えて雲の峰　湛水

青梅も手のとゞく丈の道　如蟻

若きは日も筆にかく香の花　麟之

柳よりけふ給ふ雲きやよし　宜水

道行も學は座年夕ぐれみ　春年

飛ぶる光を草に流し蛍　羽中

紛海のさゝ波寄し夜かな　宙麦

銘々めて蚊はめつき蚊帳かな　越竹

声なかる雲と見るよ秋の夕　常陸 与兵

磯の梅わかく此能咲けり　三友

手枕で鼻は先なるとかな　一兆

苔ばは古根より出ての実生かな　近江 嫁山

かしこく毒味の花の座かな　樫下

十六

用足しにしてもちたる雉子かな　信濃 蔦古

篝もえて明るき宵も梅の花　蕎露

静かさや奈良の末寺に浮藻香　上毛 一鵆

春の水流れて藪に澄井かな　良斗

河岸にうつる根元の青き柳かな　兮尾

起て見つ笑ひに萎て梅の内　紀甫

山本やとこの花さく風くさし水　仙塵

夕月や樹の隠れてかゝる波　雪居

芋の露あつまるほとく朱になり　かつみ

羽子を投て寒人の袖にかへり花　為一

初鶴の行先ほとりおもひかな　可考

十六夜も自然と咲ける新酒哉　穎甫

雨ふらぬ手鞠の花の盛りかな　亀松

篠木に伸るつ庭のあさみかな　松月

清らかに着きなり之寿新春　如松

河原のおもしろき静も峰の月　為得

ちとせ経舟の櫓拍子揃ての後　為鶴

月くのいさ松の明りも葉の外　みつめ

行かゝも尾くりしく落つるき　石明

夜嵐や物さきおもひ似合しき　梅雉

梅咲や河元まてき岸伝ひ　華市

草よりは楼まての軒より小軒　米室

日ゝ青も来ぬ遠浦は夕河の　下毛　嵐富

稗畑の暮のさひしさもちさの秋　葎外

錦えて来る松も初しくれ　其瑩

光さす常陸を好きけり　未什

初雪も咲くかはり風の後　素行

更けて行く寂しさ又ゐての轡　凱山

昼顔やあの踏月き姥子の　一作村

夕立や雲不逃梨さく　一清友

捨子鶯飛ぶ月かまへ松の作　希汐

笠の宮西日まへ伊勢の花舞楽　雲生

ふり降を拿つけに咲も艸の花　文鳥
秋くの眼にかゝりしも露の玉　梅呂
藪かけふ下諸ふ合ても猶月　布山
見なへかゝる日数そ人の待乞来　奥　花よ女
物りふかきこぼれまゝで多年の秋　一此
海かくる秋も紐ゆ人おち　吾円
世の花子ふ又つくりかへ割りけ　如雲
草も未た賤しき月の奈青かれ　仙河

咲くくの合香味かり草の露　緑柳
名月や宮城野の木の芝支度　遊河
草の戸もめり葉ちるの故里　小麟
笠ぬけて旅人通る秋のあり丸　玉之
見よとる清稜の規模も秋嵐　一漪
秋雲やちらん撥ても小体達　一仙
採るる秋つく夜初る砧の布　錦苔
身体に香り帰りても秋の夕日　蘭江

さゝやきも花奢の窓より夜の月　　呂月

縦横の菴もち梅田の小家かな　　南溪

秋の書の古り墨すれて筆かれし　　貫三

雲と落る螺りは果も秋の暮　　三帛

ひとりきさ二百十日も露なかり　　龍山

かさねては今日の日のけふり枳雲雀　　尺路

春のかさ雲し開きし障子かけ　　李輔

涼しさも満つりはちりく夏ちる氷　　輝山

桜粉は温むらぬきみり夜羽織　　逸志

息りは物に出そめし春の雨　　左自

思ふる子に篠に隠ぬ故帳の月　　梅宋

夕風も蚕みはくろて帰かりへ　　其友

菊咲くは寺も隠居も花盛　　歴涜

みしる森も網の雫の滴りて　　鶴人

動きはしかちるてはゆるやかに拂　　梅溪

月もよし枕直もて驚の声　　蘆丈

茶を煮る音して露も本すに　五扇

露出てふき止む松の揺られ　一毛

とんぼうも米扇は尻越舞　双古

はらふべき雨を招にて鶴志の幽　文仙

笑外に見えぬて菊葉採るなり　枕葉

餅の香には作りに先る行く子　竹丸

蚕ひつ柳さへつけゝり宿替の秋　米也

竹の花も降らぬ日和の曇りかち　梅月

やうやく竹ある尾も移しけれ　三槐

汁の実は菜にきざみ出すに　大網

遠くは田子に穴請日暇有らり　出羽　清風

年めには小笑子に成り秋の聲　播泉

竹の葉や自に逢しら花を露　二葉

西行の月は義々さや窓の下　素山

梅白し書けをもさせ枝に又夜　峰雲

影へ来る風のくるい被布の裾　雲岱

けりとり藪のそれから田植哉　重貞

菜子咲るあたりは見えて行とし　國春

花雲や露は更に冥ふ秋の物　魯也

秋もちのころの涼しやおとし水　瓊山

鴬の同しあらしも我は声　松紫 而先

いとあみの縄にかけたる夕哉　一旭

舟まつや僕合に見ゆる蜆かな　小鯤

汁かけて見えるやそうめの茶　巳千

雉子啼や浮雲は利うて山かな　類芝

涼しく来啼かみの山の春は雪　橘雪

野辺山の夕べ見る思ひかり　耕雲

元日は目に見儀るまての入かな　如旭

山霞や黄葉ものや思ひ紅葉　磯文

笑ひし郭公の一声　楊雲集　洛山

初とし波のお秋は掛りかな　楠芳

朱かしも日の難きる女し啼　可摩

七夕や物て驚る晴さへの雨　斗米

項の見えて夢みり今の夜半　見之

本みけりる床の明りや秋の水　可慈

鉦に啼くも見ゆすやまくら寝かな　巳旦

山のし秋風やすへらりくる子　貫滌

窓の身をさちり様の花る様子なれ　一帆

見えるしも海渡く〓時雨　小崖

名月や雲を寄くなる草の人　一甫

ふりかへる神の都りこそ筆の露　和好

立初ましろうはきの角力取　加賀 宗史

段ところ寵の中くゞり猿ぐこの庭　紀州 暁籟

明けても見るさの足かな　越中 燕兮

争ひて今日月に山家かな　越後 乙良

明かたの徐る日と落し秋霧　自昇

家くらし雲吹のうはへ夕日の　千布

猿光も雑子明山を夕かな　靖賊

往く人や花も折りては菊ばかり　静池

花まで見し目は果もなし小春かな　好静

鐘は聞えつれて遠し一字紅葉　鶯山

名月やかつて衣裳や衣の垢　信陽　樹之

咲くや秋は見えて深山わかち植　之甫

植木やる遊人の声ぞ日和　因幡　寸風

蕉翁の月は旅立の衣裳は　左山

糊衣の洗ふ時先めでたさ哉　伯耆　茶丈

来て聞けば花ならぬ梅の色　勧家

体までも花の名ありての一枕　石見　一枕

よりかゝる花の寒さよ萩の色　書泥

見渡せの衣の物さへや萩の上　備前　涼味

錦や見て流しけり落葉哉　帝園

好人を遅く見る納豆汁　備後　升角

冬よりは雨も寂しや冬の雲　安藝　甘古

はるかなる葉先もよくや蛙哉　紀伊　宋那

山吹や東に二日の坊ともり　阿波 菜雪

ちる花のひらひら餅や鍋の上　讃岐 木长

木ハ見えぬ花の奥の紅や桜川　伊豫 常石

小夜子香まくの藤咲は桃月　筑前 宇逸

望の月見えぬ小娘しろふの月　紀州 悠々

鶯の竹にゆるゆる阿る日やさしの静　日向 双鳥

菜種や東に給へる花かな　伊勢 五鈴

油売やありて深つて涼し床　雅要

さし汐に秀て見けしの一重かな　雲州 波園

日をとりし給へる立て雲のうへ　桃五

菜の花ハそよそよ上へりて乙鳥かな　百古

茶の湯にして萱にいる花も紫かな　菜紅

阿けぼのハ雲へはるる花の水　幻糸

時鳥飛時声をいつの花たか　顧水

菜にとまりて蝶の月かな　弘淵

雲霧に初日さす色の花ならん　旅崖

茶の花や折〻ならす座頭坊　　曲洞
山遠き里へ出て見る寒念仏　　生湖
初しも山や雪解の水のかさまかり　　素交
春は雪降けり足へ寒き哉　　少我
松風のふところにしまる袷かな　　寿和
身ひとつをいるゝ小屋の静かさ　　宗五
花に見て今や五月は梅若し　　桃支
若竹や茶を汲ませは日なけ　　冬雪

沖へ出て見れば並にや小田の雁　　銀臥
暑き日に先見てぬるむ清水かな　　石聲
暮かゝる見えて庵の蚊やり哉　　小松
なにゆへに暮くれて一眠に草の花　　素明
遠山に霧立のぼし鳴ゆかり　　学仙
撫山や暑におちる松の茶　　拾椎
暮かけし止まる白さや菊の風　　米足
自萩にも見とれ立ちても桐の葉　　江水

うたゝ橋ゝ枝のつゝみ木のめかな　玄子
初東風や水を離るゝ水と鳥　みゆき
初ゆきは何鶴老の薹や春の色　春湖
りん〳〵聲や徳里にたゝへ啼雉　寿好
かけ筆みちとり啼と言の月　梱古
春はうの花よりかるゝ雲山かな　出雲　百年
空ゝ毒や立ゝ村のたるなり　松縁
太つわと小鴨にかな沢のあき　莫笠

鶯やうけ筆待ふ秋のさけん　竹亭
山蝶ゐるを待ちる蛙かな　可孫
藪うけや寺峯のつるし昼の月　鶴石
りむ雪や梅さけて来る角力取　竹朋
紅葉しまみつ物ぞうへ東山　鴫元
ふう虫は明ほ春の夕かな　省承
はじまや蛙けふ浦は家　桂我
鳴きてや絶きかけかや螺出なり　百齢

さゝ葉にあられさゝめく山路ハ　葉和

常盤木に釣られて来る花の露　周水

秋曇り晴れ行く流れの跡かしは　如川

秋起の蛍火も見えて杉の葉　五升

月の弥やふりかけて経初ならし　松翠

清くなる虫にぬれたし袷かな　素涼

月の出や雲涼しさも花の朝　学白

さゝやき学の葉先や春の風　梅里

初雪や隣の葉先に見るかなし　白岑

夕陰に咲ちる白しおもくます　瀧帆

君と寝は一番鶏に邑ありけり　素羅

月の出てさくさくなりかる音鈍　孟蟻

梧桐の葉色もまさりぬれにけり　松羅

常々よかり露にぬれたし初鳥　菊藤

折てかく見る山吹のつまくは　竹江

かきあけて柿葉落る時雨かな　龍尾

雪ふりの日自之をとはんと草庵を出
杖をとゞめてその秋出で行けるに隣里
時来てこそ椿をさしてくらしやしのぐ
武に水杖をふく人をも人に結し
て椿をかへり年ト寄る残せ勝して
一句をぞ聞ける

行便りせぬ絹来や月に花　　山外

往昔よりある人この木葉に行ひつゝ
しき只存在で秋に笠をかけして

秋くれや花野をわけて帰る人　　自之

小車集追句之部

落葉舎にて

大らか庵とあれはてゝも時枕　　自之

そのかりぬ冬篭をふきて待春　　山外

雪の出ぬけ錦ゆきぬ向ふかな　　之

山路行くゝ乃錦めくる自　　外

鮎さみの深き瀬色を見て出り　　之

たゝ人をすら何もしらぬ一枚　　外

石梢にあつて能成る色也　之
きのふつらきさ紅猫の引解　示
身のくへをうらうらはかなく涙ぞみ　之
涼しく瓜をむききうきさわぎ　示
夕立は生駒の方へ吹なくる道　之
あかしらぬて来る船の松植　示
鮮の日けに望み月の自ら秋　之
講能くつま中にたへくきみ　示

あらくと緑君に凄く病あり　之
碁盤へちよつと寄る手灯　示
芸の香を吹出すと紙風に落し　之
ほろしのかゞる笠のふしまき　示
けふるは去るくのくらぬ様見えり　、
夜きん菜のもろめ張る壁　之
老なうり佛にむかふ叩き鉦　示
以つに松の花見え翁ありさむ　之

よくゆにきれいな金のまきみち　尓

亥ノ子角力も夕に聖うする　之

京恵へあつく汁して降られ　尓

糀の花を嫁まふ上戸　之

いつやらは酔うて鮨を買ぬく　尓

和尚の扮にうつきつきけれ　之

ふつそりと月は更くる向ふ岸　尓

貝から定し啼子昔よぶ　之

中々にえしは高い蒲萄棚　尓

せんそりの針も清税の究　之

爺々婆々の来世を経る菜らん　尓

沖を行帆の印見れば数　之

情ありよし花にかかりぬ秋の鐘　尓

数多の番戸まちかねる里　之

咲ぬ日ハ春け迄て梅の蕾かな　念ゝ

ぬる迄蕗のけふ冴かへる垣　不遠

檣なは羽織着て出る春なれや　月之

一寸法師も仕廻ふ我手へ入　念

片よせる山雀籠に月の影　遠

衣しめ秋来る板の手ならへ　之

絃擬のたゝくうち結の上　念

錫杖振りて眠りさます様　退

壁つの声つきさ去のゝ合　之

来もとのもさるゝれにけらし　念

妙柱ハ雨迄ハ暮るゝ日陰町　退

あつきしく水をちつしけり太　之

衛宇の盂生菜ハおしけのうき　念

簇鉢瓜のつゝ迄しる霧　退

月に森ぬ不足をかくれ去わかれ遂　之

乙孫つゝ花さく市施の小包　念

箋なりけりしくらて自筆にて　退
こたひ本州をうちての作物　之
室生と出てつかはさる蔓接錦　念
りつての㕝肉千本らは夢見し　退
折ちかかはいてとくはまる漆刷毛　之
出て迷惑千万ものなき物　念
内證はまとまのきれぬ味にて　退
身のかうんのおもはぬさりけき　之

菓の節はたしかに御状著　念
候らつての後りけ数寄鉄　退
眼茶をきらしては数さくにしもき　之
おりしも名物とあきのきる雲　念
煙草掃除りのたかかる自の鞘　退
常にもおこのみかけ　重取　之
野の宮様宮元は今にも先にて　念
けつまてなりぬ本のとまり系　退

ゆきさせて面に吹出す南定　之
宮守実生の君なくもむく　念
見分けおる程楊る彩雲雀　巴
めしくの不穀のそろふ首途　之
落雪も中くく糀めく絵小うとひ　月之
墓手あつまる春の鶯岩　右 不つ
数ふく文床の高低手を今　之

机みまき裳直手居眠り　つ
小菅丈のちろ男の声わい目　之
糸瓜の棚を傳ふ木巌　つ
霞白を分け社の蝶きとひ　之
見送るうけ老人の愛くくる　つ
身のしめみいなくは噂は亀の澗れ　之
酒場のかよふ手ちろ老行　つ
时多過い下手静りくい　之

舟よりも経る五月雨の中　つ
情衰へつゝ菓子の名も京参り　之
燭帽屑の木末くゝりの宮　つ
下宮札もありあかせる入院者　之
おもくみ新の沙しまける月　つ
茶の湯進出しられてむの夢　之
雛のしたゝみ白みに勝負の　つ
中庭のくれ〳〵吹きす新吐麦　、

うきくもの見ゆる白雲　之
裁しゝ小袖の丈のうしろくる　つ
うちこ笠の竹のは綾め結て添れそへ　之
鐘撞る音をつかしむるさめ　つ
行幸あしく沙して鐘る梅　之
小男鹿の神の流用よかれハ大さまく　つ
松坂のおさらしき集宮の使　之
うへきせつゝ醫者法葉も人を達　つ

跳る黒手折しきまと峰　之

氣で淡ふ花ら門月の陰かゝ里　〃

今度の物とく先に危しの家　之

無常でハ自我偈斗なくあるく　〃

二日も晴て塀乃出る山　之

見ちかし能よまゝかく古性　〃

打角かりて生れ出ぬ鶏　之

渕たゝ物くろく籠を結しの縁て　〃

壹話乃花で消る閑笑　之

青天ふ聲の古ぎるかりの非　自之

動いの如多年出りゝ子親　曼斎

蚊室の伝くを旅く掃出して　雪葉

刀ふ象ぐ能りまぐとく君　之

淡しく月ふ吹るかは上　斎

ゆるゝ一膳手ちしぬ番縁　葉

咲のこ咲く角力の顔は見ゆ　之
かつら葉のよそ〳〵暮くらき　壽
竹の中からよ小の足ぬ稔ひ哉　菜
汗ふくとれし化粧なりけり　之
陣とり紀宮も志きりに向ひ來し　壽
普請のうちに雨ぬぬ操縦も　菜
鯖は売も自見に売ぬは売へく鉄　之
松寓物とてしよきる秋風　壽

うつし蒔細りつゝのふ打針し　菜
入院後皆のつとふ入る鐘　之
墨造紙お料経はうきと花の頃　壽
干ると薪ふこまて海苔麁朶　菜
蕎麦のかゝ咲てもかなまも節　丶
見なくぬ人の跡をいつき居　之
浅塗の萬銭の袖を牽出て　壽
足中の噂ももち旅つゝ哥　菜

袖きのへかくれつゝも湿手紙　之

先づ掃きの隣まてのし　壽

出しては仮其はずくはなる濡れし　菜

来て呼ぶ声のうて嫁ハ出てて見ぬ　之

急なる事にハ行りぬ着物の縫直し　壽

露ありて売ふいける草市　菜

月ハいつ落て出やつて天の川　之

収るは新酒の細きハ行る壁　壽

洗濯の裡ハともつはる縫ひつもり　菜

穂穂あつけるまうり侍筆　之

懐みのこて郡持る物あるも書　壽

麦ハうつ細工よりも美しく　菜

比ろしくもり桃のさきに雛の花　之

三人なるも白酒に酔　壽

花やしき

名の花みて行来ハめのつく桔梗也　沙石
ならの中刻ふ出づる月の山　月之
二の川ふ初鮭押し聲立て　石
行くての下諏訪のとれもうらく　之
恵らなき菓葉痛の粉並也　石
雲打ちのしつやきまの雫か　之
椴へふつらく植えうきうれて　石
位の忘れぬ公家の痩しらる　之

着きのりやうえて幸きい湖の笹　石
我わのむさき汗のかくれる　之
年ごとハ宗らいたくて郭ふ痛なら汁　石
猿のう猿牛抜れにう猎　之
月きらく一番立をふれそえ　石
豊化すれ紫業の矢もよ　之
剃たまふ角力の嫡和の叶園也　石
鑓らのく亀の茨子傘のたゆき　之

盛んしらぬ待る花咲て　名
初虹消る夕やけの中　之
野の宮も去年の念仏つれ忘　、
近きに来る孫の泣聲　名
ありけなくなりし能ある燈板　之
昼ハなくつも精の夜らぬ松　名
志於ふ可ふ混舞をなき覚く　之
出来ものしらしを笑ひけふ意　名

まつ明るう雪ふ鹿の錦の音　之
粉の落ち散りのつかみ有　名
篤きうへ何をもかのするる古手店　之
小の岐回らを出さねいのうち　名
名月ハ若便られさし家作り海　之
明石は林も須广あたりの鐘　名
灰のつきはらの鰹の春近く　之
茶の新も若々ますらぬ祝起　名

補陀落のうしろ乃あふ細　之
勤めかはりて法杖持ていて　呂
暁に花を見て来し人の浅　之
日もてつれ／＼と伸る夜の月　呂
若つくも宮菓子蒸し句なき　一京
鳴くに鶴ぶらきは水若　月之
めしの下焦る句に大事ありて　遊石

板をふまへてそろりの出入　京
樹の元に落のつまる様の月　之
帰りま実のゆる露のおもかげ　石
此ころは瞬眼に使はるゝもの　京
いくつ迄生るる也さなん　之
ある日渥美に会て持病のさうじ　石
二階から見える兄の申す遣　京
小差しも以前の時雲　之

麦社糠のこほれしきはる　逸
物着をらくし吟味講く　京
秋の猿森は月をたのしみ　之
やく宝る皿の絵具のかくれかね　逸
先き出よへ歩り庭めうすき　京
花の時道あてこと行ち〳〵の内　之
折りたくみなき納屋の初屏　逸
日永さふつまらぬ物をはしきまひ　ヽ

ゆらぬ反古をたゝみおりて　京
戯しうすゝ伴を出行ゝ花見の店　之
湊ちつうてらく流行醫者　逸
口くるまを留めて洞をつくしみ　京
かりく綿織を気さらくしる　之
過去帳は机の上に出用あり　逸
植て筋より風の来る竹　京
ちらく〳〵と鯖のさけるほとり鮒　之

見たる小紋のよろ手のよろ　迹
紅うすく新しきせしも晴れ目　京
紙る葉山子みどる篭笠　之
粉鉢ハ木鉢ハふさく榜粉橋　迹
供ゑ紅ふりも練ま京代　京
隙かくそ花よ伴たる大祥朱　之
赤い格子の丈けも見まくき　迹
紗ぞろれを散しハはぬ冨のむ　京

青色のよう子半は紬　之
山雀小服を浅くりれるくらた　自之
用も未ん絞りも小まめく新　常住
稀紬二葉のいとかをふとあかを　之
紅つらい着物いまいりも新　住
見ゑて紅かきハ浅る絞の目　之
うつる紅葉ふれも色くまき　住

夜の明てゆく物淋しけり　之

療治の直まで耳遠なる　住

結納を呉て計に泣落し　之

國へ行る孫を育るね役　住

一日もかけぬ表具の手をかしけ　之

戸口を叩く人の名をさかす　住

けふも又客をと云や月の舟　之

千本か桜の花も雲にかくるる　住

張網に入てもまたぬ豆もし　之

物をしらぬかそれよも秋　住

茶をかくぬる陸生き天竜に　之

そろりつ壺耳ゆくさき風　住

立秋も椽へちる四笹の葉　来城

何つやりくて月の名残れ　月之

鉤なし御車をくる須濱櫻　朱

辞宜はせられぬ都の人　之
手はなしのつらき並に新参　朱
声まじく脇よき秋の鶯　之
杜をも外に撃子をばやりて　朱
先後浪にゆられぬ分別　之
破られし夢も法然様へ参らん　成
花の名を聞ても袈裟のこしらへ　之
雲も見えず似たるも呼子鳥の啼　朱

風葉よりのつよき岩が根　之
黒衣ぞ紀も凭れぬ猿が那也　朱
消えて重陽の人のいふき　之
荻役して船に仕切を待ちつ　朱
笑ひめみはなき棒の手を見る　之
月影を出でしへ行きる蟷螂へ　朱
鉾につくる蝉乃そりぬき　之
其先にはもやみ鯨袴　、

下縫ハ出ぬみそけり僮ぞゝ　朱

初産の子ハ男子花ぬ花やし　之

そ生花の花くらひ戻さぬ晴み　朱

幕の沼を花の人ゝ花いる日暮ガ　之

山まり花ハ雲の雲の子り出し　朱

色けの土し雲鯨の花子男より　之

資花ろうくれゝ嫌やみゑり　朱

花ゝ世ハ見へ程花せ物を落し　之

見つの花以子のけのゝひ子ける　朱

蕉ふくを吟る芭下の川ふ月　之

いの世まさきらぬ柳うつる　朱

露素よかゝんの花のふ瓦出　之

ゆらんきぬ身ハ老ル年あき　朱

據中ゝ来国重ハのけゝおれ　之

樺花のめゝ伐のくゝ坂　朱

茄さく雲社中より芸ここそ　之

声さびしさに啼つる雁　朱

涼しさや光さして動く艸　山水

休ふらちを明かける蝉　壺哉

水から瓜の上へ力をとり纏て　自之

久しふり逢ふ夜こその息才　水

百の峯きまくぬけきらぬ月の隈　哉

露に何くるき畑一枚　之

霊孫の数くあつめる彼岸中　水

深き気高きしみしの精　哉

ましらなの衣ハ海にぬきをと遠　之

被布若さに出くるき女ともね　水

柔和接見ての手燭を折るを見　非

何くきこへ限して自るる浮雲　之

使船手も内ふところを攀て遠　水

猶も笑ふしも文幕をとる　非

木庵の二行物をかけて見る　之
出来あきに買てもめる袖垣　水
老松とりて茶ハ毛まで入てくさき　執
秀ハんへしに主の人の作の　之
速きを折りて見る花ありて水　常住
渉る桝に自ら梅向けて南　自之
生鮭箸なく未練拭巾ニ結付て　山水

塗らくさせて醴飲かよての女　住
口のるまハつとめて帰る月の頃　之
咲しちてのちハ霞みる数　水
淡鮎の漾てしまる瀬に舟　住
去遅留ニ熱も方をしらせ　之
数年袖あさて風呂場の用を乞ひ　水
時雨ニあかるる路二三羽　住
尤よきうつ気もの今なる薬の奥　之

施し申付候處の餘　亦
代變く自分嫌ハて迷惑ニ候　住
接す前ニ於ての山ニ筆　之
然の須要結接療を思ニ出し　亦
仕舞為相ニ付候しれ然　住
之ニ其り衣て町家の肴ニ迄　之
笑しのみれ賃ニ文ニ之自　亦

一奇仙首尾

海山をこえて年の末も自ら雲　經旬
速ニて賀しる約書初寄　自之
皆様新保存候ていてく候ん　旬
来て何るす紙ニ私も村つき　之
日ニ而あらて外ゆる如る炭壹回　雨
菜をおし分て一つま給ひ仙　之
何分もなくて法ずは古社　丶

花のふ時のハ行つきくらん芭　南
蕨出て数を争ふる鳥羽織　之
肴の口に豆腐ぐらぐら煮　白
篝きて紙芭の小牡丹竹の注を　之
花ノ井の水鉢かける苗代　白
うき雲ふ戸川くて香は自然に　ち咏牛
藤川や投出素のまゝ也　柳塘

継ぐ事貴き由をすまく人は済し　自之
流灌の泥のどかと来る川　牛
うらみ竹ふ帯の澄きの眼し　塘
眼うつり鉢しそ買ふもる雑　之
春日の口ハ行らかく露きもる　牛
ちきりくハ行出て家の土舗　塘
鞍ヶ井のハ行とをかける出家生　之
似た人にもけハ人たゝりける　牛

風にのる時ハ蛍の流きゆして　壚
ましく自乃童跡る自代　之
手お未ふ漸く沼も刈仕舞　牛
きぬく打つゞけされきゆる　壚
嫁入ける去世の真ろぬきくれ数　之
鉢の子の片枝折あけ留て　牛
夕やきゝ鐘ふ若られ蛍日和　壚
露もおし渡ゆて引浮　之

凉風も去きの内もちるぬ程　自之
埃やりを俺ふ探の自いの竹　松竹
打粉能刀ともりふ行よきそ　之
むかしを忘ゆ不浄る人きぬ　竹
橋際ハ市の出さき肉売めき　之
伸しは行しの若まる雲雀　竹
看経の外子用なき留守居して　之

醫者に掛れはあとから豆　什
油手を拭ふ着物の袖ゝみ　之
根の出来ぬるみ揺る舟　什
句帳に書きとめ置く屋敷之　之
善光の代をかつ維見かゝる　什
一日法衣を静めかけ居る月　之
義をも重ね流るかれぬ築　什
射出しよりもの多き浮沽春　之

念仏をとめぬ僧を来依せる　什
縁起の古風を読る奈良の紙　之
冬しけれ霜の暁に　什
手の治をふけてまとめてかゝる　、
なにとて稲子あつかぬ落着り　之
眼さかす廓の秋の忘きる　什
蔓の紅も年越しの霄　之
不幸さへ信解に叛き向かれす　什

ねりふ爪くつ中ぬ便舩　之

若菜なふしの咲柳ぬ袖のあき　付

ふと自由若らる二階家あき　之

なまく営業ハ利を儲け過し　付

あらけて菊の香益見えける　之

自然は露の気ふき八重葎　付

無ふ色ゑてもゆくとそとる里　之

言ゑつゝを存りんの響ふとん　付

眼利しくして買ひのめる鰻　之

明近き小用に起て床ともふれ　付

出さしく下駄の通る砂利道　之

物とのうらくはそのそまい茶の話　付

着ふ死をそろえくしくの　之

風雅也月之佛人の古跡ゟ一集を
編ミみ川ちとしなと頼まれ
出しけるかくなる事くと画見る事
序らんとの意を持おす事も筵露集を
八雲の鳳けるものを 水無瀬も唱ふ
是は道の知こもつけもおそしくすく
其道の立てを事を 輙く人こそあらし

寺外なりし序文の発句を揃へ
爾しかしむ見る事をくるものか

月麿

嘉永壬子梅日